

創作の軌跡

—エミリー・ディキンソンの詩の異稿研究(3)—

稲田 勝彦

I. はじめに

本研究は、『ED詩集』¹に収録されているエミリー・ディキンソンの詩の異稿をその形態と内容にわたって考察しようとするものであり、本稿はその第三稿である。²

第一稿では、『ED詩集』の成立の過程、異稿の定義と分類、採用稿決定の原則など、主としてディキンソンの異稿に関する外的事実について考察した。その結果、採用稿1,775篇の半数強が何らかの異稿を持つ詩であり、これらの詩の異稿は、①代替語句の記入のある採用稿、②複数の原稿を持つ詩の採用稿以外の原稿、③二つの異なる版を持つ採用稿に大別できることがわかった。

第二稿では、上記①の代替語句の記入のある採用稿を対象に、代替語句の形態および意味を分析して、そこに働いていると思われる言語的・心理的・思想的要因を考察した。そして、ディキンソンは、1)誤字や語法的・文法的誤りを訂正し、また、用語上の論理的矛盾を正そうとした、2)脚韻等を考慮して改変を試みることもあった、3)同一語、類似音を避けるために改変した、4)詩の語意または文意をより明確・平易にしたいという強い気持を持っていたこと、その結果、彼女は①言葉不足を補うために語句を追加した、②難しい語句や表現を比較的平易なものに変えた、③隠喩やイメージを平明なものにした、④奇矯とも思われる語句を平凡なものにした、⑤衝撃性の強い語句を比較のおだやかなものに変えた、などが明らかになった。

本稿では、第一稿で定義した異稿のうち、詩の行全体に対して代替行が与えられている採用稿を対象に、代替行の形態および意味を分析して、そこに働いていると思われる言語的・心理的・思想的要因を考察してみたい。

II. 代替行の形態

ディキンソンは、詩の改作を試みたとき、単に一語あるいは数語を抹消して代替語を与えるかわりに、行全体を抹消して代わりの行を書き込むことがあった。たとえば次の詩である。

例 'Tis so appalling—it exhilarates—
So over Horror, it half Captivates—
The Soul stares after it, secure—

To know the worst, leaves no dread more— (P-281, S-1)

ディキンソンは、この詩を清書してパケットに収めた後、どのくらいの期間を経てからかはおそらくわからないが、この連の2行目の“it”の左斜め上と4行目の行頭に×印をつけて、詩の終わりの余白に次のような代替語句および行を記入した。

2. it half Captivates] → it dumb fascinates—

4]→ A Sepulchre, fears frost, no more—

本稿で考察の対象としたいのは、2行目のような部分的な改変ではなくて、4行目のように、1行全部の改変が企てられている個所である。具体的には、『ED詩集』の编者ジョンソンが、ディキンソンが上例のように行全体の改変を指示した部分を、その形態や意味内容にかかわらず、採用稿の末尾に印刷したすべての代替行を意味する。1,775篇の採用稿のうち、このように代替行の書き込みを持つ詩は150余篇、書き込みの個所は180余个所であった。

ディキンソンの詩の異稿を分析して彼女の創作の軌跡を明らかにしようとする試みにおいて、特に代替行に焦点を絞って検討を進めることの意義は、単語の改変が主として動詞や名詞や形容詞の代替であり、したがって、詩全体の意味に与える影響が少ないと思われるのに対して、1行あるいは2行全部にわたる改変はしばしばその詩の全体の意味に影響を与えると思われるからである。

1,775篇の採用稿のうち代替行の書き込みを持つ個所は180余个所であったが、これら180余个所の代替行の形態的特徴をまず分類してみよう。

1. 事実上単語の改変に等しいもの

代替行は、ディキンソンが行全体の書き換えを指示したものであるもので、形態および意味の非常に大きな改変を含んでいるにちがいないと想定しがちだが、実際には単語1語の改変に過ぎないものが多い。

例 By the Wizard Sun—] → By the Setting Sun— (P-291, S-1)

例 The privilege to say] → The liberty/Authority to say— (P-517, S-4)

これらは、“Wizard”を“Setting”に、“privilege”を“liberty”または“Authority”に変えるという単語1語の改変とまったく異なる。次の例のように、5種類もの代替語が与えられている場合もある。

例 Into Solitude—]

→ back of/At the/After—/Unto/next to—Solitude— (P-291, S-5)

また、代替行が同時に2個所の単語の改変を含み、数個の代替語を持つ場合もある。

例 Her Jaws stir—twitching—hungry—]

→ Her Mouth stirs—longing—hungry (P-507, S-2)

例 And true the other one.]

→ And best/real/bland/fine/fair the newest/newer one (P-1349, S-1)

次の例は代替行が3個以上の単語の改変を持つ場合である。

例 Alighting at the Dwelling/'Twill enter like a Dart!]

→ Advancing on the Transport/'Twill riddle like a shot. (P-1319, S-1)

例 And Kinsmen as divulgeless/As throngs of Down—]

→ And Pageants as impassive/As Porcelain (P-1445)

2. 語順の変更

ディキンソンの指示では行全部の改変となるが、事実上は単に語の順序を変えただけのものもある。

例 Was justified of Bird—] → Of Bird—was justified— (P-805, S-1)

例 Goes nor comes away] → Comes nor goes away— (P-1385)

例 Nothing with a Tongue or Ear—]

→ Nothing with an Ear or Tongue— (P-1385)

ディキンソンは何ゆえにこのように単純な改変を試みたのだろうか。

3. 語句の追加または削除

語句を追加または削除し、更に語句の改変をおこなうこともある。

例 If momentarily ajar—] → If Her sweet Door—ajar (P-559, S-4)

例 Oh, what a livid boon!] → What an appalling boon! (P-1757)

例 At last—the Grace in sight—] → The Grace is just in sight (P-550, S-5)

次の例などは語句の追加の変形と考えることができる。

例 Can Anybody tell?] → Where are they—Can you tell— (P-499, S-2)

例 I've ransomed it—alive—] → I've found it—'tis alive— (P-763, S-4)

4. 構文の改変

採用稿と代替稿との間で、「句」が「文」になったり、平叙文が疑問文になったり、否定文が肯定文になるなど、相互に構文の変化を伴う改変も見られる。

例 Without a syllable—] → But deign no syllable (P-282, S-3)

例 And scans with fatal promptness]

→ with what a fatal promptness (P-1773, S-2)

例 Although to their Celestial Call/I failed to make reply—]

→ Though their repeated Grace/Elicit no reply (P-932)

例 The absence of the Witch does not/Invalidate the spell—]

→ Who says the Absence of a Witch /Invalidates his spell? (P-1383, S-1)

5. 全面的改変

ディキンソンが与えた代替行は、語句の追加・削除や構文の変化が著しくなるにつれて意味の変化の度合いが大きくなり、ついには、まったく異なった語句・構文・意味を持つにいたることがある。それは、完全な改変に比べれば改変の程度がまだ小さいと思われるものから、表現・内容共に完全に異なってしまうものまでであるが、いずれも詩人の改変の意図を推測する上でもっとも興味をそそるものであると言えよう。

例 From Manzanilla come!] → Leaning against the—Sun— (P-214, S-4)

例 Just a Dome of Abyss is Bowing] → Acres of Masts are standing (P-291, S-5)

例 Dont you know—me?] → Why—Slay—me? (P-497, S-4)

例 Delirious Charter!] → Good affidavit— (P-528, S-2)

例 Defies Topography.] → Forbid that any know— (P-929, S-2)

例 And Kinsmen as divulgeless/As throngs of Down—]

→ And Pageant as impassive/As Porcelain (P-1445)

以上が採用稿に書き込まれた代替行の形態的分類だが、重要なのはディキンソンがなぜこのような代替行を書いたのか、その言語的・心理的・思想的意図と意義を考察することである。

III. 代替行に見る詩人の意図

本稿は、ディキンソンが単語ではなく行全部の改変をくわだてた個所の意図と意味を考察しようとするものだが、前章で見たように、彼女が行全部の改変を指示した場合でも事実上は語句の改変にほかならないものが多い。したがって、彼女がどのような意図をもってこれらの代替行を原稿に書き込むにいたったかを推測するにあたって、すでに第二稿でおこなった代替語句の意図の推測と同じ結果になることもしばしばある。言い換えれば、ディキンソンはおそらく語法上・表現上不適切と思われる個所を改善しようとして、音や韻律を考慮して、あるいは、語意・文意をより明確・平易にしようとして詩の改作をくわだてたのであろうという推測は、代替行の分析の結果としても妥当性を持つということだ。しかし、代替行の中には詩人の心理的・思想的変化の軌跡を読み取ることを可能にしてくれるものも多い。以下、ディキンソンが代替行を与えた意図と意味を、形態と内容の両面から推測してみる。

1. 音や韻律を整えるための改変

代替行に見られる改変の意図を詩の形式面から推測してみると、ディキンソンが押韻やリズムや音的効果を考慮して詩行の改変をくわだてたことがわかる。彼女は、脚韻に影響を与える恐れのある語句や行の改変を避けようとする傾向を持っていたけれども、押韻への努力をまっ

たくしないわけではなかった。次の例は脚韻を整えようとするための改変だと考えられる。

例 Till I could take the Balance
 That tips so frequent, now,
 It takes me all the while to poise—
 And then—it does'nt stay— (P-576, S-5)
 21]→ It isn't steady—tho'—

この連の2行目の“now”と4行目の“stay”は、ディキンソンの押韻の習慣から言っても、明らかに押韻していない。これを“tho”にすることによって不完全ではあるが押韻が可能となる。

ついでながら、上例の改変に脚韻を整えるという意図以外の意味を読みとることもできる。この詩の大意は、私は子供の頃から神様を信頼することを学んできましたが、今は懸命に信頼と不信のバランスをとり続けなければなりません、しかもそのバランスは定まらないのですというものだが、ディキンソンは、“And then—it does'nt stay—”という、どちらかと言えば断定的に響く表現を、“It isn't steady—tho'—”という、強い響きを弱める力を持つ譲歩的な表現に変えようとした。これは、ディキンソンが信仰に関わる詩などを改変するときに神を批判したりする調子を弱めようとしたことがあったが、それと同じ心的傾向だと考えることができる。押韻への努力の例をもうひとつ見てみよう。

例 Thenceforward—We—together dwelt—
 I never questioned Her—
 Our Contract
 A Wiser Sympathy (P-743, S-6)
 22-23]→ She—never questioned Me—
 Nor I—Herself—Our Compact—
 24. Wiser] → wordless—/silent—/speechless—

この連の2行目と4行目は押韻していない。ディキンソンは2行目の主語を“I”から“she”に逆転させることによって行末に“Me”という語を得て、“Sympathy”との押韻をはかったと思われる。なお、“Wiser”に“wordless”などの代替語を与えようとしたのは、より平易な表現をとる意識が働いたからであるであろう。

代替行の中にはただ語順を変えただけのものがある。単なる語順の変更は、詩の意味には関係しないので、詩の形式との関係からおこなわれるのが普通だが、たとえば“Eternity—obtained—in Time—” (P-800, S-1) を“Eternity—in Time obtained—”に変えようとした詩人の意図は、押韻やリズムをいくら考慮してみても、推測することは難しい。しかし、次

の語順変更の例は押韻への努力を示すものであろう。

例 This Bauble was preferred of Bees—

By Butterflies admired

At Heavenly—Hopeless Distances—

Was justified of Bird—

(P-805, S-1)

4]→ Of Bird—was justified—

4行目は、採用稿の方が倒置もなく、また行末が1行目の“of Bees”と呼応していて整った感じを与えるが、それにもかかわらずディキンソンがこれを改変しようとしたのは、2行目との押韻が改善できると思ったからにちがいない。

語の並べ替えに等しい次の例は詩行のリズムを改善するためだと思われる。

例 Could Hope inspect her Basis

Her Craft were done—

Has a fictitious Charter

Or it has none—

(P-1283, S-1)

3]→ Her Charter is fictitious

この連の3行目を、採用稿と代替行それぞれについて音節に分けて表記すれば、次のようなリズムの違いを持っていることがわかる。

Hás a fic-tí-tious Chár-ter

Her Chár-ter ís fic-tí-tious

ディキンソンは、時間を経て原稿を読み返した時、自分の詩を推敲者の客観的な目で読むことができ、したがって、リズムのわずかな不整合にも気がついたのであろう。

先行する語の音の響きを考慮して代替行が与えられることがある。

例 Why did'nt we detain Them?

The Heavens with a smile,

Sweep by our disappointed Heads

Without a syllable—

(P-282, S-3)

9. detain them] → retain them—/[detain] it

12] Without a syllable—] → But deign no syllable

見えないものを見るチャンスが与えられているのに見ようとはしない人間に対して、天は何の言葉もかけず、微笑みながら通り過ぎてしまいますという大意を持つこの詩の最終行を、ディキンソンは“Without a syllable—”から“*But deign no syllable*”に変えたいと思った。「句」から「文」へと構文は変わっているものの意味に関するかぎりほとんど変わりはないのにあえ

て代替行を与えたのは、この連の第1行の“detain”という語の響きに呼応する語として代替行の“deign”という語に魅力を感じたからかもしれない。

次の代替行の例も同じ意図を持っている。

例 I do not know the man so bold

He dare in lonely Place

That awful stranger Consciousness

Deliberately face—

(P-1323, S-4)

16]→ look squarely in the Face.

“Deliberately face” はわずか2語から成る行だが、音節数は2行目と変わらない。それなのにこれを“look squarely in the Face”と5語の行にした方がよいと思ったのは、“dare”と“squarely”の類音の効果を狙ったからであろう。

先行する語との音的効果を考慮するだけでなく、行の長さまで揃えようとして改変をくわだてたと思われるものがある。

例 God the Son—confide it—

Still secure—

God the Spirit's Honor—

Just as sure—

(P-626, S-2)

8]→ Equal sure—

この例でも、意味はほとんど変わらないのに最終行を“Equal sure”にしようとしたのは、“Still”と“Equal”という語の音の響きの効果を考慮したことと、さらに語数を2行前の“Still secure”と同じにしてその簡潔性を持たせようとしたからにちがいない。

2. 語法上あるいは表現上不適切と思われる個所の改変

ディキンソンが清書稿や未清書稿を読み返したとき、語法上あるいは表現上不適切と思われる語句に気づいてこれを改善しようとしたと推測できる個所は代替行にもある。

例 God is indeed a jealous God—

He cannot bear to see

That we had rather not with Him

But with each other play.

(P-1719)

3-4]→ That we desire with ourselves

And not with Him to play.

嫉妬深い神は私たちが神とではなく私たちだけで遊ぶことを好みませんという意味を持つこの詩を読み返したとき、ディキンソンは最後の2行の構文がセンテンスとしては明らかに誤ま

りであることに気づいて、“had”という動詞を“desire”に変え、これに“to play”という目的語を与えて、これを正しくしたと思われる。

まちがいは言えないが、語法上もっと明確にしたほうがよいと詩人が判断した結果と思われる代替行もある。

例 Not any Port

Nor any flight

But he doth there preside

What omnipresence lies in wait

For her to be a Bride

(P-1496, S-2)

9]→ Where he does not preside

11. her] → one

11]→ For an impending bride

私がどこにいても、何をしても、あの人はずぐそばにいますという意味を持つこの詩の第2連3行目の“But”はもちろん否定を含む接続詞だが、一般に否定語に続く接続詞“but”の構文はやや古めかしいけれども端正な感じを与えると思われるにもかかわらず、ディキンソンは否定の副詞“not”を表に出すことによって、より理解しやすいものにするのを好んだと思われる。

11行目（最終行）の代替行は単に語法上あるいは表現上不適切と思われる個所を改変すること以上の意味を示唆していて興味深い。ディキンソンは、この詩の第1連では話者は終始「私」となっているのに第2連ではそれが「彼女」になっていることに気がついた。彼女はこの不一致を正すために“her”を“one”とするか、あるいは、一挙に“For an impending bride”にしてしまうか迷ったにちがいない。彼女としては、遍在者が待ちうけてくれる花嫁とは彼女自身のことであって第三者の女性であってはならないから、“her”は当然変えられなければならない。そこで“one”という、より一般的な代名詞をあてることを考えたが、それでも不十分に思われて、第1連から読めば自然に彼女自身を指していると読める“For an impending bride”にしようと思ったのであろう。

次の代替行の例は、語法的な誤りでも意味が特に曖昧でもないが、詩人が不自然だと感じて変えたいと思ったと推測されるものである。

例 Music's triumphant—

But the fine Ear

Winces with delight

Are Drums too near—

(P-582, S-4)

15]→ The Drums to hear—

「音楽は高々と鳴りますが、繊細な耳は喜びつつもひるむのです」に続く最終行は、パラフレーズすれば“Because Drums are too near”というということである。ディキンソンはこのように1行だけポツンと付け加えられたような感じを与える表現を不自然に思っ、これを“*But the fine Ear winces to hear the Drums*”としようとしたと思われる。

詩の内容の論理的整合性を求めて代替行を与えたと思われるものもある。

例 Dreams are the subtle Dower

That make us rich an Hour—

Then fling us poor

Out of the Purple Door

Into the Precinct raw

Possessed before—

(P-1376)

5-6]→Into the minute raw

We owned before—

この詩の5行目の代替行は事実上“Precinct”という単語に“minute”という代替語をあてるといふ改変に等しい。詩人は最初の部分で、夢とは私たちに「1時間」だけ豊かにしてくれる寡婦産ですと時間の用語を用いたのに、5行目では“Precinct”という空間の隠喩を使っていることに気づいたために、これを“minute”という時間の用語に変えるべきだと考えたと思われる。

3. 意味の明確化、表現の平易化のための改変

第二稿で指摘したように、ディキンソンは語意または文意をより明確・平易にしたいという気持ちから語句の改変を試みるが多かったが、代替行の分析からも同様の傾向が指摘できる。その努力のひとつは特殊な、難しいと思われる語句をより平易な表現に変えることであった。

例 The Whole of it came not at once—

'Twas Murder by degrees—

A Thrust—and then for Life a chance—

The Bliss to cauterize—

(P-762, S-1)

4]→ The certain prey to tease—

死の恐怖は一度にやってくるのではありません、それは一寸刻みの殺人で、ナイフでひと突きしたあとで生きのびる機会を与えるのです、喜びの傷口を一時的に癒すのですという大意を持つこの連で、ディキンソンは最初“cauterize”という語を用いた。しかし、後にこれを読み返したときにはこの語があまりにも特殊すぎ、また難解だと思ったのであろう。“cauterize”

(傷口を焼く)が意味的には“Murder”や“Thrust”と密接に関連している語であるにもかかわらず、これを“The certain prey to tease”という行に変えようとした。そこには“cauterize”よりも“tease”の方が“degrees”という語とより適正な押韻を構成するという計算もあったかもしれない。なお、“The certain prey to tease”という代替行は、猫が手中の鼠をいたぶるという第2連の内容に影響されてできあがったものであろう。

意味の明確化、表現の平易化を志向すれば、当然、隠喩を避けようということになる。

例 How far is it to Hell?

As far as Death this way—

How far left hand the Sepulchre

Defies Topography.

(P-929, S-2)

8]→ Forbid that any know—

墓はどれほど左手にある?という問いかけに対して、それは「地誌学の及ばぬところです」と結んだこの最終行は、ディキンソンの学術語好みを示すひとつの例だが、彼女は、押韻を犠牲にしてまでも、これをもっと平易な“Forbid that any know”にするべきだと思った。現代の読者から見れば、これはいわゆるディキンソンらしさを失わせる改悪の例だと思われないうが、彼女が隠喩をこのように平易化しようとしたという事実は無視するわけにはゆかない。

次の例は、必ずしも隠喩を避けることによって表現の平易化をはかった場合とはいえないが、興味ある代替行である。

例 It sprinkles Bonnets—far below—

It gathers ruddy Pools—

Then—eddies like a Rose—away—

Upon Vermillion Wheels—

(P-656, S-3)

10. gathers ruddy] → makes Vermillion—

12]→ And leaves me with the Hills.

この詩は、秋は赤色の雨を降らせ、赤色の水溜りを作り、それから赤い車に乗って引きあげてゆきますという内容の、秋を客観的に描写したものだが、これを読み直したとき、ディキンソンはおそらくこの客観的風景描写の中に自分自身を登場させたいと思ったのであろう。それが「私は丘と共にとり残されたのです」という代替行になったと思われる。それはなぜだか、夕焼けと風を客観的に描写した“*She sweeps with many-colored Brooms—*”(P-219)という詩の最後で“*And then I come away—*”と詩人自身を登場させた効果的な手法を思い出させる。

4. 直截な表現を隠喩化するための改変

前項とは逆に、あまりにもわかりやすく平易であるために、メタファーを使って書き直そう

とした代替行もある。すでに引用した “‘Tis so appalling—it exhilarates—” (P-281) がその例である。

例 To know the worst, leaves no dread more—]

→ A Sepulchre, fears frost, no more—

この詩の大意は、死でも真実でも亡霊でもただ推測したり遠くから眺めているときは非常な恐怖だが、勇気を出してそれを手に握りしめるか直視するかすれば、その恐怖はなくなるというものだが、「最悪を知ればもう怖くはない」という表現があまりにも平明、直截過ぎると思われたのであろう。ディキンソンはこれを「墓ならもはや霜を恐れることはない」と隠喩化しようとした。

例 And though the Wo you have Today

Be larger—As the Sea

Exceeds it's Unremembered Drop—

They're Water—equally—

(P-660, S-3)

11. Unremembered] → Undeveloped

12] → They prove One Chemistry—

海はその記憶さえされない水滴よりはるかに大きなものだけれども水であることに変わりがないように、あなたの今日の悲しみも、大きなものかもしれませんが、昔のひとつひとつの悲しみと変わらないのですという大意を持つこの連で、ディキンソンは “They're Water equally” という非常に平易な表現を “They prove One Chemistry” と隠喩を用いて書き直し、それに連動して前行の “Unremembered” を “Undeveloped” に変えようとした。これは明らかに難解化だ。ディキンソンは “experiment,” “oxygen,” “phosphorus” などの化学（科学）用語を用いることを好んだので、この “Chemistry” もそうした彼女の好みの表われにすぎないかもしれない。しかし、彼女の “Chemistry” は、しばしばキリスト教の復活の教義と結びついた物質不滅の法則をその背景に持っていて、たとえば愛は形を変えても本質は変わらないということを行うために用いられたりするように、希望を象徴するイメージリーであることを忘れてはならない。³

次の例も隠喩化によって難解化が生じたものである。

例 She squanders on your Head

Such Threnodies of Pearl

You beg the Robin in your Brain

To keep the other still

(P-634, S-7)

27-28] → Deny she is a Robin now

And you're an Infidel

ディキンソンの詩としては比較的長いこの作品は、春になると駒鳥がやってきて、その姿形や鳴き声からあの駒鳥だとわかるでしょう、でも三月が過ぎ四月になると、そのかわいらしい駒鳥があなたの頭に真珠の挽歌を浴びせるので、あなたは頭の中の駒鳥に彼女を黙らせてくださいと頼むのですという大意を持つ。頭の中の駒鳥とは、自然界の駒鳥に触発された詩想のことであろうか。この比較的平易な表現を持つ最終2行をディキンソンは「彼女は駒鳥なんかではないと否定すれば、あなたは異教徒です」に変えようとしたわけだが、この代替行が意味するところは、駒鳥の存在を無視しさえすればあなたは駒鳥に心をかき乱されなくてすむ無関係な存在となれるでしょうということであろうか。

5. 詩人の心理的・思想的変化に伴う改変

ディキンソンの代替行を検討してみると、改変の動機が、これまで述べたようなものではなく、原稿を PACKET に収めてからこれを取り出して再び見直すまでの間に何らかの心理的・思想的変化が起こって、そのために詩のある部分を改変する必要があるためと推測できる代替行がある。

例 But Time had added not obtained

Impregnable the Rose

For summer too indelible

Too obdurate for Snows—

(P-1444, S-2)

7-8]→For Summer too inscrutable

Too sumptuous for snows

この詩の大意は、彼女と会ってから何十年もたった今、彼女の髪の毛には雪が混じるようになりました、でも薔薇は難攻不落で、夏もこれを消すことはできず、冬もこれを説得することはできませんというものだが、“indelible”を“inscrutable”に、“obdurate”を“sumptuous”に変えようとした詩人の意図は、この部分を見ただけでは、推定しがたい。ジョンソンが言うように、この詩が1878年に Helen Hunt Jackson がアマーストを訪問したと関係があるとすれば、薔薇に喩えられているのは H. H. ジャクソンである。とすれば、改変の対象となっている形容詞はジャクソンという女性を形容するためのものだ。ディキンソンがこの女性を形容する言葉“indelible”（消すことのできない）と“obdurate”（説得になかなか応じない）をそれぞれ“inscrutable”（不可解な）と“sumptuous”（壮麗な）に変えたのは、彼女がこの詩を書いたときに持っていたジャクソンの印象がこの詩を見直したときには変わってしまっていたからかもしれない。あるいは、ディキンソンがジャクソンの節操を曲げない毅然とした女性という人物像よりも、奥深い豊かな女性としての人物像を強調したくなったのは、この詩をジャ

クソンに送るかまたはこれが何らかの機会に彼女の目に触れることを予想してのことであったかもしれない。

心境や考え方の変化が詩の改変に影響を及ぼしていると思われる例は、ディキンソンの信仰に関する詩にも見られる。

例 Suffice Us—for a Crowd—
 Ourselves—and Rectitude—
 And that Assembly—not far off
 From furthest Spirit—God— (P-789, S-3)
 12. Spirit] → Faithful
 11-12] → And that Companion—not far off
 from furthest Good Man—God—

何物にも揺るがないどっしりした自己、確信、大理石の基盤を持つことはなんて素晴らしいことであろうという内容を持つ1-2連に続くこの第3連の大意は、私たちの群に必要なのは私たち自身と高潔、それに一番遠くの霊=神から遠くないところにいるあの集団ですというものである。Richard B. Sewall は、この詩をディキンソンの詩人としての意識と結びあわせて読んで、この“Assembly”を「天国の聖人たち」あるいは「彼女がすべてだとみなし、その一人だと考えた詩人たちの集団」のことかもしれないと解釈している。⁴ 問題はディキンソンがなぜ“Spirit”という語を“Faithful”という形容詞または“Good Man”という名詞に変えようとしたか、“God”と“Good Man”を同格にしたことの意味は何かということだ。ディキンソンは神やキリストを人間がただ畏怖するだけの存在としてではなく、むしろ人間と悲しみや苦しみを共有する者としてとらえることを好んだ。「イエスが父のことを語っても、私たちは信用しません。その家を示してくれても、私たちはそっぽを向きます。でも彼が私は悲しみを知っていると言ったら、私たちは耳を傾けます。悲しみは私たちにとっても知己だからです。」⁵ 神を天から引きずり降ろし、身近な存在とすることは、確信をもって生きるための彼女の戦略であった。

次の例も信仰に関わるもので、いわば心理的トーンダウンが見られる詩である。

例 The Devil—without question
 Were thoroughly divine (P-1479)
 7-8] → The Devil—so amended—
 Were durably divine—

ディキンソンは、悪魔は有能なので、誠実ささえ持ってさえいれば、最良の友となり、「疑いもなく完全な神性を持つことでしょう」と書いたものの、これを読み直したとき、おそらく

「悪魔は疑いもなく完全な神性を持つ」という表現があまりにも反信仰的であると思ったにちがいない。それで彼女はこれを「その不誠実ささえ矯正できれば、悪魔も永続的に神性を持つでしょう」とトーンを弱めたのだ。このような改変をなさしめたのは、ディキンソン自身の心境が以前よりも穏やかになっていたからだろうか、それともこの詩が人の目に触れた時に異端的だと思われることのないよう配慮したためであろうか。

この「心理的トーンダウン」に通じるものとして、断定などの調子を弱めるために改変しようとした例がある。

例 Had we known the Ton she bore

We had helped the terror

But she straighter walked for Freight

So be her's the error—

(P-1124)

3]→ Smiled too brave for the detecting/for our detection

4]→ Till arrested here/Till Discovered here.

この詩の大意は、彼女の重荷の大きさを知っていたら助けてあげたのに、彼女がさっさとその重荷を担ったのですから、(そのために彼女が倒れたからといって) 悪いのは私たちではなく彼女なのですというものだが、ディキンソンはこれを読み返したとき、「過失は彼女にあります」という突き放した言い方があまりに強すぎて、冷淡に聞こえると思ったにちがいない。“Till arrested/Discovered here” という代替行によって、救いの可能性を示唆しようとした。その結果、ディキンソンの厳しさ、ドライさや小気味よさが失われたことに失望を感じる読者がいるかもしれない。

6. まったく異なる語句・内容を持つ代替行

前項までの代替行の意図考察では、採用稿と代替行との間に語句・イメージ・意味内容に関して何らかの共通点があって、それが詩人の改変の意図を推測することを可能にしてくれるものであった。しかし、ディキンソンはまったく異なる語句・イメージ・意味内容を持つ代替行を与えることもあった。たとえば、次の例である。

例 Till Seraphs swing their snowy Hats—

And Saints—to windows run—

To see the little Tippler

From Manzanilla come!

(P-214, S-4)

16]→ Leaning against the—Sun—

これはディキンソンの詩のもっとも印象的な改変の例だと言えるが、では彼女がなぜ“From Manzanilla come!” という最終行を“Leaning against the Sun”に変えたいと思った

のかということになると、代替行が採用稿とは完全に別ものであるだけに、その推測は難しい。せいぜい「太陽にもたれかかる」という壮大な宇宙の構図がディキンソン好みだったからという理由づけぐらいしかないかのようにも思われる。

代替行の意図を推測するのに「それはディキンソンの好みだったから」というのではまったく話にならないが、実はこの「ディキンソンの好み」という説明を持ち出さないと推測しづらい改変が結構あるのである。たとえば、代替行が単語の追加を含むとき、その追加された単語はしばしばディキンソンの好みを表わしていると思われることがある。

例 Upon her Mat] → On her *Rush* mat⁶ (P-303, S-2)

例 Attempted to expound] → Did *timidly* expound (P-568, S-3)

例 Is my renown] → My *low* renown (P-1560)

例 That any other buy] → Lest *Richer* people buy (P-1108)

例 We and our plotting Heart] → We and our *pouting* Heart (P-1345)

例 Till the suggestion sinister] → Till *Treason* lightly propagates/
Till *Perjury* insinuate (P-1451, S-2)

例 Alighting at the Dwelling/"Twill enter like a Dart!]
→ Advancing on the *Transport*/"Twill riddle like a *shot*. (P-1319, S-3)

上例の“Rush,” “timidly,” “low,” “pouting,” “Richer” は、いずれも自分自身をかよわい臆病な子供、身分の低い貧しい存在とみなして、金持ちや身分の高い人々を批判的に見ることを好んだディキンソンの性向を表わすものだし、“Treason,” “Perjury,” “insinuate,” “Transport,” “riddle,” “shot”などは彼女の愛用語といってもよい単語である。

しかし、非常に異なる語句・内容を持つ代替行でもその意図を推測することがまったく不可能というわけではない。先程の“Leaning against the Sun” (P-214, S-1) について言えば、ジョンソンが言うように、“Manzanilla”という語は「ディキンソンがキューバの南海岸の重要な商業都市“Manzanillo”をラム酒の輸出と結びあわせた」結果として、すなわち酒との連想で用いられた。⁷ この架空の都市名は、R. Patterson が言うように、ヨーロッパや中南米に対するディキンソンの趣味を表わすものであろう。彼女にとって中南米は「計りしれないほどの富あるいは成就し得ない願望を意味する象徴」⁸であった。それゆえにこの地名は自然界でもあり天国でもあるこの詩の舞台の非現実性を強調するために適切であった。しかし、彼女はこれを改変しようとした。ディキンソンが原稿を読み直したときまず気になったのはおそらく第1連の“Frankfort”であった。この都市名はたしかに新鮮なイメージを喚起するが、銀行や産業・商業の都市であるフランクフルトを素晴らしいワインと連想上結びつけるのはやはり難しいのだ。“Sip old Frankfort air/From my brown Cigar” (P-123) という詩行もある。

そこで詩人はまずこれをロマンチックな河として知られるライン河とライン地方のワインに変えた方がよいと思った。となると、今度は最終行の“Manzanillo”がいかにも不釣合に思われる。そこで彼女好みの壮大な宇宙の構図をとって“Leaning against the Sun”としようとしたわけだ。それによって2行前の“run”と完全な韻を踏ませることもできた。

IV まとめ

ディキンソンの詩の代替行を考察した結果、次のような特徴を指摘することができる。

1. 1,775篇の採用稿のうち、代替行の書き込みを持つ詩は150余篇、書き込みの個所は180余個所である。これら代替行の形態は、事実上単語の代替に過ぎないもの、語順を変更したものの、語句を追加または削除したもの、構文を変えたもの、および、まったく異なる語句・構文・意味を持つものに分類することができる。

2. ディキンソンは次のようなことを意図して代替行を与えたと思われる：①音や韻律を整えるため、②語法上あるいは表現上不適切と思われる個所を改善するため、③意味の明確化、表現の平易化をはかるため、④直截な表現を隠喩化するため。

3. ディキンソン自身の心理的・思想的変化に起因すると思われる代替行がある。そこでは、信仰や人に対する態度の厳しさが緩和される傾向がある。

4. 代替行が語句の追加を含む場合、追加された語句はディキンソンの愛用語句・イメージであるものが多い。まったく異なる語句・構文・意味を持つ代替行も、詳細に分析すれば、その意図を推測することはできる。

注

- 1) Thoma H. Johnson 編, *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. (The Belknap Press of Harvard University Press, 1955) を『ED詩集』と略記する。
- 2) 第一稿は、稲田勝彦, 「創作の軌跡—エミリー・ディキンソンの詩の異稿研究(1)」『欧米文化研究』創刊号(1994.9), 75-89。第二稿は、同誌第2号(1995.10), 99-117
- 3) Edward Hitchcock の物質不滅の法則に関する考え方とディキンソンの「化学」との関係については、Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1955) 335-336を参照した。
- 4) Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1974) 506
- 5) Thoma H. Johnson 編, *The Letters of Emily Dickinson*, 3 vols. (The Belknap Press of Harvard University Press, 1958) 837

- 6) 以下の引用中のイタリックスはすべて筆者による。
- 7) 『ED詩集』 150
- 8) Rebecca Patterson, *Emily Dickinson's Imagery* (The University of Massachusetts Press, 1979) 143

The Trace of Composition:
A Study of Emily Dickinson's Variant Readings (3)

Katsuhiko INADA

This paper is the third report of our research into Emily Dickinson's variant readings. In the first report, focusing on the nearly 1,600 suggested changes printed in *Poems*, we considered their forms and possible intentions which the poet might have had in writing the suggested changes into her fair copies.

In the second report, focusing on the suggested changes of words, we analysed the forms and meanings of the alternative words and showed the intentions with which Dickinson might have tried to change those words.

In the present study, we examined the suggested changes of lines in the same way. The results are as follows:

1. Of the 1,775 poems in the *Poems*, about 150 poems have alternative lines, and the number of suggested changes is about 180.
2. Those alternative lines are given in the forms of change of words, change of word order, addition or elimination of words, and change of sentence constructions; some suggested lines consist of completely different words, images or meanings.
3. Dickinson's intentions to rewrite a whole line are to give a proper rhythm or rhyme, to improve unnatural or logically contradicted words and expressions, to make the meanings of words or sentences clearer or easier to understand, and to replace too simple and straight an expression with a metaphor.
4. Some of the suggested lines can be attributed to the changes in Dickinson's psychology, attitude to people, and belief or faith. They seem to suggest that, when Dickinson attempted to revise her poems, she tended to soften her severe attitudes which she had had when she first wrote the poems.
5. Some of the suggested lines with completely different words, expressions or meanings cannot be explained except by saying that the suggested words or images were the poet's favorite ones. But it is not impossible to guess the poet's intentions if we make a close comparative examination into both the original and suggested lines.